

IT 技術者のウェル・ビーイング研究会、「IT 技術者にとってのやりがいをつくる」

◆第 1 回報告◆ 講演：『「IT 業界の外科部長になる」志とやりがい』

IT エンジニアとしての経験を重ね、技術者から管理者としての役割へシフトすることを求められる中、プロジェクト経験の中での浮き沈みの体験、キャリア経験を重ねながら、「IT 業界の外科部長になる」という明確な志を抱き、IT 技術者としてのやりがいを持ち続けてきたことなどについて語っていただいた。

■日時：平成 26 年 7 月 28 日（月） 18:30～20:30

■場所：専修大学神田校舎 7 号館 6 階 763 教室

■講師：株式会社豆蔵 BS 事業部 チーフコンサルタント 杉山 光治様

■講演テーマ：『「IT 業界の外科部長になる」志とやりがい』

■参加者： 9 名

◆講演次第◆

(1) 自己紹介、成果メディアに関する当研究会の検討経緯から本講演趣旨の提示

(2) 私の経験を振り返る

・12 のプロジェクトを自己分析。社会システムとの関わりを点数化、成果メディアが共有できていたか、受け入れられていたかについて検討

(3) やりがいとは

(4) 最後に

・やりがいを持ち続けるためには、①目標をもつこと、②喜怒哀楽を共に経験できる仲間がいるということ、③順風な時も、逆風のこともあることを理解すること、の 3 つが重要。

・「IT 業界の外科部長になる」というイメージには、マネジメントをこなしながらも、いざというときに“執刀”ともいえる技術的な処置ができる、チームで働く、いい時もあるが、例えば患者さんが亡くなるなどの辛いことがあっても、使命を持って働く、ということが含まれている。

・ヨットレースのイメージも常に意識している。チームで仕事をする、目指す目標がある、順風な時だけでなく、逆風のときもタッキングという方法で前に進むことができる、ことからである。

●質疑応答（メモ）

Q1: 自身のやりがいとして、技術的なことがベースにあり、+マネジメントがあった場合にやりがいを感じたという点は、いつ時点でそう感じたのか。この講演のための検討をしたときに、わいてきたことか。

→A: 以前から感じていたが、この講演を通じて、より明確になったと思う。

Q2:外科部長とやりがいとは？

A: どうやりがいを感じるか、執刀 (=アーキテクト) もでき、マネジメントもできるという意味。

→その内容は、マネジメントの範疇ではないかと思うが？

→アーキテクトの定義にもよるが、共通の方式・手法を整備する役割があり、より多くの知識・経験が求められる。

Q3:元々理系か

A:文系である。技術的なこと、C言語にはまったきっかけは、社会人になって入った会社で周りに優秀な技術者がいた。「自分が美しいと思うものを作った」ことを周りが受け入れてくれた。

→30代でプログラムをやろうとしたら、外注化するように言われることが多いのではないかと。

Q4:プログラミングは、ベトナム。中国などに出す傾向があり、単価が安い方へなされるのではないかと。

A:私はプログラマーというより、アーキテクトという役割。海外で製造することになっても、その前工程として設計・開発の方式や、基盤の整備、標準化、また海外で製造されたものをレビューや検査など、製造が、100%海外にとって代わられるのかどうか、という問題。

Q5:基盤系ではなく、業務アプリ開発だとIT業界の外科部長のイメージは？

A:要件定義が難しいケースがあり、あてはまると思う。私も業務のモデリングを仕事で行うので、実感としてある。

Q6:経営者にとって、純粋アーキテクトより、マネジメントが重要視されるのではないかと。

A:自分は両方みていく感じ。確かに技術的なことは日本では軽んじられる。

Q7:プロジェクト評価で、自己評価と会社からの評価にギャップを感じたことは？

A:自分が思っているより、会社から悪く評価されたことはないと思う。

Q8: (あるプロジェクトの新技术導入について) うまく成功させるためにどうしたのか。

A:小さく始めた。製造業での試みであり、“見えるか”の適応。技術的な提案を最初は受け入れられなかったが、効果を実感してもらえるようにした。

Q9:新しい技術よりもお客様の要望が中心なのではないかと。

A:お客様の要望が中心である。

Q10: ネットでのコミュニケーションが主流になってきているが、対面でのコミュニケーションが重要ではないか。

A: お客さんに丁寧に説明して、わかってもらえるようにする。いろんな手を使って、納得してもらえよう、よい方向に向かうようにする。

→折衝力、説明する力が、求められる。

Q11: 成果メディアについて、杉山さんは経済的なこと（＝貨幣）を一時期、重視していたことがあったが、元に戻ってバランスがとれるようになった。お金ばかりに興味に向くと自分の中で矛盾が生じた。

→米国では、貨幣中心。日本人はまじめだが、外国人からみると結果がでない。お金以外に守るものがあるのか？究極は人の為か。

→米国では、自分が思ったような評価が受けられなければ、仕事を移る。

Q12: 労働市場が流動化されていない、ベンチャー企業がでてこない傾向があるが。

A: IT 技術者は、むしろ流動化されていると思う。

→年代にもよる。40代をすぎると、転職はしづらくなる。

Q13: IT 技術者の中には、人との関係が苦手で、コンピュータに向かう仕事として IT 技術者になることを選択する人もいるが。

→成果メディアとして、「プロジェクトを成功裏に導く、評価を受ける」ということがあるのではないか。

Q14: 今日の発表内容は、ラッキーな方の事例なのではないか、キャリアアップできなかった人もいる。

A: 自分はラッキーだったと思う。

→運だけでなく、努力もされていると思う。今日の講演に関しても、依頼した内容以上に、時間を使って準備してきていただいた。

◆まとめ・今後の予定◆

・IT 業界でプロジェクト経験上の困難と、成果メディアとの関連で自身が感じるやりがいとに焦点を当てて議論を進めることができた。今後も、事例ベースでの検討、特に困難なプロジェクトを成功させる中でやりがいに結び付く成果メディアを抽出し、体系化を図っていく。

以上